「おのくん」とパンセ・ソバージュ

杉本 星子（すぎもと せいこ）
京都文教大学教授

東日本大震災から約一年、仮設住宅のお母さんたちの手により「おのくん」が作られた。被災地の子どもへのプレゼントから生まれた手づくり人形がつなぐものとは。そして、そこに息づく「思考（パンセ）」とは。

「おのくん」とパンセ・ソバージュ（三色すみれ）

否定形で語られる「手芸」

手芸とは何だろう。同じように糸や布を使った手しごとであっても、生活に役立つ裁縫がまさに手の「仕事」とみなされるのに対して、手芸は「芸」である。芸といっても、職人芸でもまして工芸でもない。アートの世界で「手芸っぽいね」という評価は、アートとはいえないというダメ出しらしい。手芸を語ろうとすると、たくさん否定形がでてくる。とはいえ手芸の力はあなどれない。はからずもそれを再認識させたのが、二〇一一年三月一一日に起きた東日本大震災だった。震災後、仮設住宅に身を寄せた女性たちを支援しようと、全国からミシンや端切れ、古着の布などが寄せられた。そんな仮設住宅のひとつから、「おのくん」が生まれた。

「おのくん」の誕生

二〇一一年一一月、東松島市小野駅前応急仮設住宅がつくられた。集まった約八〇世帯の多くは旧野蒜（のびる）地区の住民だったとはいえ、さまざまな集落から来ており、互いにほとんど知らない同士での再出発だった。女性たちは、以前なら魚加工の仕事をしたり、畑仕事をしていたが、津波で職場も畑も失ってすることがなくなり、集会所に集まってお茶のみをして過ごしていた。「ともかく、ヒマだった」ので「何かを作ろうよ」と、支援でいただいたミシンと布を使って巾着袋や服、コースター、お手玉に目をつけた蛙などを作り始めた。できたのは「しょーもない」ものだったが、それでもおしゃべりをしながら手を動かしていた。

年が明け、震災から一年ほどたったころ、あるボランティアさんが仮設住宅の子どもに、靴下で作った猿のぬいぐるみ「ソックモンキー」をプレゼントした。そのころ、復興支援の企画のなかで、それぞれの仮設住宅がモノをだして売ることになっていたが、ここの仮設だけ何を作って売るか決まっていなかった。そこで、みんなでソックモンキーの作り方を習った。こうして、二〇一二年四月二〇日、記念すべき「おのくん」第一号が誕生した。

「おのくん」の里親になること

最初は誰も売れると思っていなかった。ひとつ千円、資金は〇円。在庫は三〇個まで。それ以上になったら働かないで「お茶飲み」をする。赤字にならない範囲で作ると決めた。初めは、ボランティアさんが買ったり、知り合いに売ってくれたりした。作りはじめて三カ月が過ぎたころから、人を介して「人形がほしい」という声が届けられるようになった。それまで、「めんどくしぇ、めんどくしぇ」と言いながら縫っていたので「めんどくしぇ」人形といっていたが、ちゃんとした名前をつけようということになり、「小野駅前でつくっているから『おのくん』でいいんでねえ」ということで、「おのくん」になった。ただし姓は今も「めんどくしぇ」である。

あるとき、東京で復興支援の催しがあり、東松島の物産を販売することになった。ボランティアさんが「おのくん」も持って行ったが、「欲しかったら東松島に来てくれ」といって見せびらかすだけで売らずに帰ってきた。少しでも多くの人に東松島に来てもらい、自分の眼で被災地を見てほしいと思ったからだという。こうして、「おのくん」が欲しい人は東松島に「おのくん」をもらいに行って「里親」になる、というお約束ができた。里親さんたちは、フェイスブックの里親コミュニティ『目指せ！ おのくんと七〇億人のタヅバナス』や『おのくん親ばかサロン』に、「おのくん」との日々を写真でアップし、ときどき東松島に里帰りしてお母さんやほかの里親さんたちと交流したり、復興支援活動「おのかつ」をする。やがて「おのくん」の話は、クチコミやSNSで国内だけでなく海外にまで広がり、入手するには半年待ちといわれるほどの人気者になった。

おのくんのお母さん武田文子さんと新作絵本（おのくん公式HPより）

「おのくん」に息づく「野生の思考」

ぬいぐるみの原型は呪物としての人形だという。「おのくん」が、東日本大震災という巨大な自然の力に対峙（たいじ）した人びとが心や生活を立てなおすなかで生まれたのは、偶然ではないだろう。「おのくん」の材料は里親さんから送られてくる。ハイソックスや五本指靴下、モコモコ素材の靴下など、いろいろな人が選んださまざまな靴下が世界中から集まり、お母さんたちの手しごとによって「おのくん」が生まれる。ひとつひとつの「おのくん」は、人びとの協働で創造される唯一無二のブリコラージュ（器用仕事）作品である。「おのくん」を介してお母さんたち同士、お母さんと里親さん、里親仲間が隠喩の親族関係で結ばれ、東松島の被災者の思いと震災の記憶を共有するコミュニティが作りだされる。レヴィ＝ストロースは、贈与の霊が動き出すとき、ヒトとヒト、ヒトと神が互酬的な関係でつながる世界が創りだされるとして、ヒトの文化の根底にある「パンセ・ソバージュ」すなわち「野生の思考」を論じた。「おのくん」には、近代の「栽培された思考」によって確立した裁縫、アート、工芸という分野が、「女子どもの手すさび」としての手芸に押し込め放逐してしまった「野生の思考」の根源的な力が、生き生きと息づいているようである。